ロシヤ・ソビエトにおける中国文学研究

川上久寿

東洋学の一部分としての中国学はロシヤ・ソビエトでは西欧と異った独自の発展をしてきた。西欧では資本主義の発展とともにその餌食として植民地としての東洋諸国を調査研究するために東洋学が発生した。つまり東洋の歴史，経済，言語，文学，芸術，その他の物質的，精神的文化遺産を研究する学問を綜合する東洋学は過去現在において欧米の植民地或いは半植民地であったし，また現にあるアジヤ・アフリカの諸国が東洋学の対象であった。

資本主義の植民政策の必要性から生れた東洋学は植民政策のためにつかえてきた。これが欧米東洋学の本質的特徴となっている。したがってその研究のはじめから人種差別の偏見をもち，欧米のいわゆる「西欧文化」と対置され，「東洋文化」にたいしては中傷的であり，東洋民族は昔から今日にいたるまで後れており，自己の運命をきりひらく能力にかけた劣等民族とされ欧米人のみが歴史の主体であるとされてきた。これが欧米東洋学の主流であったといえよう。ところがロシヤの東洋学はややちがう。資本主義的に後れていたロシヤは植民主義の面でもおくれていた。ロシヤの時の政治上の権力者は植民主義では他の欧米諸国よりもなおつよい野望をいだいてはいたにちがいないが，東洋学では現われかたがちがっていたし，はじまるのもおそい。とくに中国関係はピーター大帝の1700年代にはじまったが，本格的には19世紀にロシヤの宣教師団が北京に派遣されるようになってからのことである。これらの宣教師団のなかには偉大な学者，民主的でヒューマニズムに溢れ，植民主義のお先棒をかつがず，偏見にとらわれて中国をみない立派な人

びとがいた。これらの人びとは時の権力者の要望たる対中国通商貿易の必要性からでた中国の風俗，習慣，言語学の研究のワクをこえて，輝かしい学問的業績をのこし，さらに進んで中露の友好に献身した人びとが現われた。これは欧米の中国学には全くみられない特異な現象である。こうして19世紀のロシヤ東洋学は欧米のそれとははっきりと異った思想的分界があった。これに与って力あったのがロシヤの革命的民主主義者ベリンスキイ，チェルヌィシェーフスキイ，ドブロリューボフである。これらの人びとは東洋の植民地の奴隷化された諸民族に深い同情をあらわしていた。ベリンスキイはインド，中国につよい関心をいだいていたし，チェルヌィシェーフスキイは東洋の言語を勉強しているし，ドブロリューボフはワシリエフの仏教関係の書物に批評を書いたりしている。これらの人びとはみな東洋の歴史的事件を注意深くみまもっていた。ツァーの反動的専政のもとにありながらもこれらの人の影響をうけたニキタ・ビチューリンがロシヤ中国学の偉大な始祖としてあらわれたのは偶然ではあるまい。かれの中国学はヒューマニズムと，中露友好の精神，中国文化にたいする敬愛の念と実事求是の精神でつらぬかれているが，この精神こそロシヤからソ連へと思想，政治，社会体制の変化こそあっても，一貫して変らずにロシヤ，ソビエトの中国学をつらぬいている。本稿では資料不足のためロシヤの部分にかんしてはフェドレンコ博士の「中国文学」を主として「ソビエト大百科辞典」「ソビエト中国学」「東洋学の諸問題」などの文献にたよる外なかった。ソビエトの部分は主としてパズネーエワとフェドレンコについて述べるが紙数の都合でフェドレンコの中国文学研究については次回にゆずることとなった。

ソ連の中国文学研究はソ連の中国研究の一部分として目だたない仕事ながら，一部のひとの注意をひいているようにみえる。しかし残念ながらこの方面にかんする書物はひとつもみあたらないし，一篇の論文すらないようである。わたくしの知るかぎりではフェドレンコ著「中国文学」と中国の「人民文学」（1956年10月号）にパズネーエワの「ソ連の中国文学研究」と題する

論文があるだけにとどまり，そのほかにはあるまい。この論文は，ソ連の中国文学研究の歴史を帝政ロシヤ時代，10月革命以後の時代，中華人民共和国成立以後の時代に3区分して概説しており，6頁の短かいものである。それによると，ロシヤの東洋語研究がピーター大帝の1700年にはじまるとしているが，フェドレンコ博士の「中国文学」でも，ロシヤが中国文化を知るようになったのは17世紀のことで，中国がはじめて大使館をおいた時であるといっている。18世紀にロシヤの宣教師団が北京におもむいてからロシヤと中国の間には文化交流が行われるようになった。かれらのなかには宣教師として布教活動に従事し，北京在住のロシヤ人の宗教的要求にこたえたばかりでなく，中国の風俗習慣や言語，文化に通じた中国通，さらに進んで中国研究家や翻訳家となり，すばらしい業績を数々のこした人が多い。この人びとのなかには何十年と中国に住んで，ロシヤ人としては困難な中国研究にしたがい，中露の友好関係に貢献し，今なお学問的価値を失わない不朽の業績をあげた人びとがいる。そのうちでも特に輝かしい学問活動をした人びとは，イラリオン・ラソーヒン，アレクセイ・レオンチェフ，アレクセイ・アガフォーノフ，ステパン・リポーヴツェフ，ニキタ・ビチューリン，ピョートル・カファーロフなどであり，ロシヤ・ソビエト中国学の鼻祖といわれている。これらの人びとについてフェドレンコ博士は述べている。

「北京在住の宣教師に教育をうけたロシヤの中国学者のなかからロシヤではじめての中国語と満洲語の教師があらわれた。それはラソーヒンとヴラドイキンである。」

フェドレンコ博士はロシヤ・ソビエト中国学のもといを定めたビチューリンについてこう書いている。

「とりわけロシヤにおける中国学の基礎をきずいた人として偉大な功績をのこしているのがニキタ（修道者名としてはイアキンフ）・ビチューリンである。1808年ニキタ・ヤコヴレヴィチ・ビチューリンは9名からなるロシヤ宣教師団の団長として北京へ行った。かれの中国滞在期間は14年に達し，

中国語と中国人の風俗習慣，歴史，文化をくまなく完璧なまでに研究したが，ビチューリンの興味をもったのは主として学問であった。またかれの考えによると，宣教師団の使命はキリスト教の布教だけではなしに，ロシヤ人と中国人との友好親善にもあった。

ビチューリンがロシヤの中国学に貢献した絶大な業績はその量からいっても意義上からでも大きい。ロシヤに中国にかんする知識をひろめたビチューリンの業績には《中国，その住民，風俗，習慣と教育》，《北京素描》，《チベットの現情》，《蒙古覚書》などがある。ビチューリンは《華露辞典》（一般用にも専門用にもなる）をはじめて編さんしたし，中国の歴史的・文化的知識の貴重な資料をあつめたりした。ビチューリンはおびただしい資料をもとにして中国の民族文化の特徴をえぐる書物もかいている。ソビェト同盟ではだいぶ以前から中国文学への関心がたかまっていたが，これははやくもビチューリンの著作にあらわれている。

ビチューリンは専門家として中国文学の研究にしたがったわけではないのに，中国の生活と歴史を解明したかれの著作と，ロシヤにおける中国学の父としての翻訳活動は，ロシヤの対中国観に大きな意義をもち，その後のロシヤ・ソビエトにおける専門的な中国文学研究の土壌となっている。」

フェドレンコ博士はロシヤ・ソビエト中国学の父としてのビチューリンについて以上のように述べているが，これは面白い。ロシヤ人が中国文化に接するようになったのは，17世紀で，中国がはじめて大使館をおいた時だそうであるが，その当時のロシヤとしては偉大な中国文化から何物かを学びとろうという気持があったかどうか，きっとなかったであろう。むしろ政治・外交通商貿易の必要性にせまられたものにちがいない。パズネーエフの「ソ連の中国文学研究」によると，ピーター大帝が1700年6月18日に次のような命令をだしていることを記している。「善良で教養ありあまり年寄でない中国語と蒙古語をマスターできる僧侶を23名派遣せよ。」ピーター大帝は新らしい国づくりのためロシヤの後進性を克服しようとして徹底的に西欧化をは

かったひとであるから，中国文化に学ぼうという気持はなく政治外交的に通訳を必要とした程度ではなかったのではないか。ところが派遣された僧侶たちは中国語と蒙古語をマスターし中国人の風俗習慣をしらべてその要望にこたえたばかりでなく，また単なるエキゾシズムにとどまることなく，さらにつき進んで中国の歴史・文化の研究に異常な学問的情熱をもやし，いまなお価値ある学問的業績をのこしている。そして中露両国人民の友好親善のいしずえもきずいていることである。ビチューリンはこの二点においてロシヤ・ソビエト中国学の開祖とたたえられてよい。私はこの偉大なロシヤの中国学者の著作に直接ふれていない。しかしソビエト百科大辞典その他にさらにくわしい敍述があるので，これにより補足しておこう。

ビチューリン（Бичурин, Иикита Яковлевич）（1777—1853）はチュヴァーシヤ人で，片田舎の正教教会の下級職員の子として生れ，カザンの僧侶学校をおえた。1807年宣教師団長として北京に派遣され14年滞在後ペテルブルグにもどると，布教に不熱心だったという理由で宗教裁判にかけられ，1822年には終身放逐で田舎の修道院へ追いやられてしまった。しかし，ツァー政府としては中国語に熟達しているビチューリンを翻訳家として大いに必要とするに至り，結局はペテルブルグによびもどされた，1826年のことである。かれの学究活動の成果はペテルブルグやモスクワの雑誌に数多く掲載されたし，1837年には科学アカデミーの通信員士に選ばれ，パリーのアジア学会の会員にもなった。ビチューリンは中国やアジヤ諸民族にかんする歴史を編さんしているが，それにはギリシヤの古代年代記よりも中国の古代年代記のほうが，中央アジヤ諸民族の歴史にかんしてはずっと完全で確かなことを証明しているらしい。また中国の古代，中世，現代の歴史の諸問題や，中国の文化と哲学の歴史，その内的関連の歴史にこたえたり，現代中国の社会構成を研究したりしている。こういう具合にビチューリンの研究分野はひろいが，その学風としては，宗教的神秘主義や民族的偏見のないのが特徴とされている。

ビチューリンはジェスイット教の伝道者や中世中国の学者，歪曲された歴史などを鋭く批判したり，中国にたいするエキゾシズムにつよく反対したり，なかなかの進歩的思想の持主だったようだが，中国の歴史上しばしばあらわれている被圧迫者たる奴隷や農民の暴動には共感をおぼえないどころか理解できなかったらしい。かれの著作中で大農民戦争はついでにふれられている程度にすぎないが，歴史事件は政治集団の斗争であることを記している。かれはロシヤにおける歴史的な中国学の基礎をすえた人で，その労作は西欧の同時代人をしのいでいた。ビチューリンの晩年は資本主義諸国が中国に対して植民主義をもちこみ膨脹発展している時代であった。そういう時にビチューリンが中国人民に深い共感をあらわす労作をものしていたことに対し，ブルジョア学者から非難と中傷がはげしく集中された。攻撃されたかれは自分の労作をロシヤ語で書いただけで，他国語で出版しようとはしなかった。ただプーシキンだけがかれの労作には多大の関心をはらっていたという。ニコライの反動時代において，かれの著作にはロシヤの進歩的な社会思想傾向と解放的なヒューマニズム精神が反映されていたというから，シベリヤで知り合ったデカブリストをビチューリンが高くかっていたという話もうなづける。

ビチューリンの研究はいまなお中国，蒙古その他の東洋諸国の歴史研究の資料となっており，東洋諸民族，ソ連の諸民族（アルタイ，ハカス，トビン，ブリヤート，ツングース）研究の貴重な資料となっているし，諸民族の風俗，精神的物質的文化をくわしく研究するための実際的材料に富んでいる。かれが蒙古旅行中に集めた資料と博物のコレクションはソ連科学アカデミーの東洋学と民族学研究所に保管されているという。

ビチューリンがロシヤではじめて「華露辞典」を編さんしたことは前述のようにフェドレンコ博士が書いているが，かれはまた1831年にロシヤではじめての中国語文法を出版している。これにはロシヤ語で綴った中国語の音韻体系が示されており，中国語の発音はロシヤ語，フランス語，英語，ポル

トガル語で書いてあるそうであるが，残念ながらこの本も手許にない。

次にビチューリンの主な著作をかかげておこう。

蒙古游記，2巻，セントペテルブルグ，1828年

中国語文法，キャフタ，1831年

15世紀から現代にいたるオイラート人とカルムィク人の歴史的概観，セントペテルブルグ，1834年

中国にかんする統計的報道，セントペテルブルグ，1837年

中国—その住民，風俗習慣と教育，セントペテルブルグ，1840年

清朝の統計的敍述，セントペテルブルグ，1842年

中国の農業，セントペテルブルグ，1844年

市民および道徳からみた中国，セントペテルブルグ，1851年

中央アジヤに居住した古代諸民族，セントペテルブルグ，1851年

古代中央アジヤ諸民族の歴史上の地名表，セントペテルブルグ，1851年

イオアキンフ・ビチューリン（自伝的覚書），科学アカデミー学術報告書，1855年

ビチューリンの翻訳（中国語より）チベットの現情，セントペテルブルグ，1828年

ヂンギス汗家の四汗，セントペテルブルグ，1829年

古代および現代におけるチユンガル人と東方トルキスタン人，セントペテルブルグ，1829年

チベットとフフノルの歴史，セントペテルブルグ，1833年

チユンガル人の現況の統計的敍述「ロシヤ通報」（ルスキエ・ヴェーストニク）1841年

フェドレンコ博士はビチューリンについで，カファーロフにうつり「ロシヤに中国の生活と文化を知らせるのに重要な役割をはたしたのはパラージ

ー（ペ・イ・カファーロフ）である。この人はビチューリンとおなじく中国問題に多くの労作をのこしているが，とりわけ有名な「華露辞典」（1888）に注目せねばなるまい。この辞典のおかげでロシヤの中国語研究は容易となり，したがってまた中国文学も知られるようになった。」と述べている。カファーロフの「華露辞典」は2巻本で，未完成だったのをポポフが完成したもので，ポポーフの序とカファーロフの経歴がついているということがソビエト大百科辞典にもスカーチコフの中国関係図書文献目録にも見える。

カファーロフ（Кафаров, Петр Иванович）（1817—1878），1817年9月17日チストポールに生れ，ピョートル・イワノヴィチ（修道院ではパラージーかれの著作はパラージー（Паладий）の名を用いている）はカザン神学校とペテルブルグ神学校に学び，その後ロシヤ正教の宣教師団員として30年北京に住み7年間に完全に中国語，蒙古語，チベット語をわがものとした。学者としてのカファーロフの仕事として名高いのは「華露辞典」を第一におさねばならないが，かれの学問の範囲はひろく多方面にわたっている。蒙古と中国の研究，満洲人，契丹人その他の游牧民族の研究，特に中国と他の諸国との交渉史や中国とロシヤ両国関係の歴史などに大いに興味を感じて研究をしている。1858年に清と英仏との戦争中に書いたかれの日記は貴重な歴史文献といわれる。カファーロフはビチューリンとおなじく中国人に深い愛着をもち，資本主義諸国の中国侵略を非難し，中国人に深い同情をいだいていた。したがってかれの著作には歴史的に形成されたロシヤ・中国両国人民の友情が強調されているという。

次にフェドレンコ博士があげているのはワシリエフである。

「ロシヤ中国学の歴史で，わが国に中国文学，とくに重要なことは芸術的な中国文学の紹介に身を入れた最初の人はアカデミー会員ヴェ・ペ・ワシリエフ（Васильев, Василий Павлович）（1818—1900）であった。ワシリエフはロシヤ東洋学のカザン学派に属していた。かれは10年間（1840—1850）宣教師として中国に滞在後ペテルブルグ大学の東洋語部で45年間教鞭をとっ

た。ワシリエフは19世紀末における最も傑出した中国学者のひとりである。かれの知識は該博でその興味と関心は多方面にむかっていた。外国語も中国語，蒙古語，日本語，朝鮮語，チベット語，満洲語に通じているほかにサンスクリット語とトルコ語族の言語もいくつか知っていたほどである。中国文学史家にとりわけ興味ぶかいのはワシリエフの中国語学と中国文学にかんする著作で，1867年には「漢字の線画的構成」，1990年には「中国文学史概論」，1884年には「漢字の分析」を書いた。

ワシリエフは中国の言語，歴史，文学の研究の重要性をはじめてみとめたロシヤの学者のひとりだった。かれの書いているところでは「中国は東洋諸国の中心であり，つねにあらゆる国を支配した征服者であり，何ケ年もの間あらゆる生活の中心であった。この国の言語，歴史，文学の研究がわれわれにはどれほど大切であるかを思わずにいられない。」と中国研究の重要性を訴えている。

ワシリエフは中国文化にたいし絶大な尊敬をしめしており，中国文化の他国民への意義を強調しながら，ロシヤと中国の両国人民の親善と友好の思想をたゆみなく宣伝した。かれは書いている。文化や教養がどんなに異ろうとも，多くの民族や人民がいた古代世界の半ばに影響を及ぼし，またいっも及ぼしてきた国のうち，最も賢く勤労心に富み器用な民族となったのが中国人ではなかったろうか。世界で最もよい気候にあり，自然の富にめぐまれ，何千年も独特な生活をしてきた民族，この民族がわれわれの注意をひかずにおれるだろうか！

ワシリエフは「中国文学概論」で文学が中国人の生活ではたしてきた高い役割に注意をむけて，中国人はわれわれよりもずっと文学を重視し，文学に人間完成の頂点をみて，人間の智的道徳的あらゆる方面の表現をみていると書いている。

この観察は深刻で正しい。なぜなら中国では文学こそ人間の道徳的形象を反映し，智的価値をあらわす鏡とみなされてきたからである。」

フェドレンコ博士の敍述をやや補足すると，ワシリエフは小官吏の子として生れ，1837年にカザン大学の東洋語，歴史，文献学部を卒業，北京に宣教師団の随員としておもむいたのが，1840年，中国滞在中に中国語，蒙古語，チベット語，満洲語を学び，1851年よりカザン大学教授，1855年よりペテルブルグ大学教授，1866年科学アカデミー通信員士，1866年より会員となっている。

かれの業績で何よりも第一にあげねばならないのは，中国語と中国文学にかんする中国学である。中国語では3巻本の「中国語教科書」をあらわしている。これには詳細な附注がついており，この種のものでは世界最初のものといわれる。1880年の「中国文学史概論」も西欧ではじめての中国文学研究書としてその内容からいってもフェド博士のことばのように高く評価されるものにちがいあるまい。このほかロシヤではじめての新らしい科学的方法による華露辞典（1867），2二巻本の「漢字の分析」（1866—87）があり，特に強調しなければならないのは，ヨーロッパではじめて中国語の音韻論，形態論，文字論を論じたのがワシリエフだったということであろう。

ワシリエフはこのほか，豊富な語学力を駆使して仏教の研究や翻訳にも従事したり，中国や中央アジヤ諸国の地理，歴史を研究し，また中国の思想，宗教にも関心をいだき，儒教，道教，仏教関係の論文を多く書いており「論語」を翻訳している（1868）。

ワシリエフの研究業績は中国の原文からの具体的資料に富んでいるため，いまなお大きい意義をみとめられているそうである。

ワシリエフの著作として上述以外の主なものは次のとおりである。

仏教，その教義，歴史と文学，セントペテルブルグ，1857—69.

元，明時代の満洲，セントペテルブルグ，1863.

中国の回教運動，セントペテルブルグ，1867.

東洋の宗教…儒教，仏教，道教，セントペテルブルグ，1873.

「ビチューリンとワシリエフの伝統はその後のロシヤ中国学者エス・エム・ギオルギエフスキイ，ア・エヌ・イワノフスキー，ペ・エス・ポポーフ，イ・イ・ザハーロフその他の人びとにひきつがれている。ゲオルギエフスキイの著作のうち中国文学史家にとり重要なのは「古代中国人の生活史を反映する漢字の分析」（1888），「中国の生活の原理」（1888）で，とりわけ重要なものに「中国人の神話的世界観と神話」（1892）があるが，これはロシヤにおける中国神話系統化の最初の試みである。

ゲオルギエフスキイはロシヤと中国の友好親善を熱心にとなえた人でもあって，中国には偉大な将来があると信じていた。」

ゲオルギエフスキイ（Ге́оргиевский, Сергей Михайлович）（1851—1893）はペテルブルグ大学教授で，1885年に「中国史の第1期」と題する論文でマギストル学位，1889年の「古代中国人の生活史を反映する漢字の分析」で博士になっている。その著作には上掲の「中国の生活の原理」（1888）や「中国人の神話的世界観と神話」（1892）のほか，「中国語の語根構成」「中国研究の重要性」（1890）などがある。

ゲオルギエフスキイは歴史研究のよりどころとして漢字の分析を重視し，この方面で基礎をきずいたといわれる。かれが研究上とくに力をそそいだのは，中国の伝統的思想や停滞を批判し，中国の歴史を広く研究することだった。しかしかれの観念論的立場のため漢民族の起源や中国の言語・文化にたいしては誤った結論もだしているといわれているが，その労作は具体的，実証的事実にとみ，ロシヤ中国学の発展史上貢献するところ大だという。

次にイワノフスキーであるが，これにはソビエト大百科辞典に見えることを記そう。イワノフスキー，アレクセイ・イオシフォヴィチ（Ивано́вский, Алексей Иосифович）（1863—1903）は1885年ペテルブルグ大学東洋語部卒業，1887年「南西中国の異民族」の論文でマギストル学位をとり，1889年「雲南の異民族」と題する論文で中国文学の学位をとる。かれはこの学位論文で中国の百科辞典や歴史上の諸著作をふまえて，漢民族が西方から来たと

いう西欧ブルジョア学者の説を論駁し，中国人の歴史的発展の統一性を証明した。1889年から1891年まで学問研究のため中国に派遣され，1891年よりペテルブルグ大学で教授と研究にしたがう。かれは中国語以外に蒙古語とチベット語にも通じていた。中露の交渉史，仏教の諸問題を研究し，選文読本や辞典の編さんにも従事した。

著作

南西中国異民族史資料，1巻，1—2部，セントペテルブルグ，1887—89。満洲文選読本，1—2分冊，セントペテルブルグ，1893—95。マンジュリカ，1—ソロン族語とダフル族語の典型，セントペテルブルグ，1894。北満の中国民謡，「東洋部紀要，ロシヤ考古学会」，1895，8巻，1—2分冊。

ポポーフ，パヴェル・ステパノヴィチ（Попóв, Павел Степанович）（1842—1913）はペテルブルグ大学東洋語部卒業の中国学者。ロシヤ外交団員として北京におり，その後北京総領事となり，1902年以降ペテルブルグ大学東洋語部の講師，助教授を勤める。1879年「露華辞典」（3版，1900年）を出版，1888年にはカファーロフの大「華露辞典」を補足完成した。この労作により1890年にはペテルブルグ科学アカデミーの通信員士の称号をうけた。かれの翻訳になる「蒙古游牧記」は1896年ロシヤ地理学会が出版したがこれには地理，歴史，考古学，人種誌学的資料として貴重なものがあるといわれる。ポポーフは中国古典に評注をつけて翻訳したひとりで，同時に歴史，地理，言語学方面の労作ものこしている。

著作には次のものがある。

白話中国語テキスト，ペテルブルグ大学東洋語部出版，セントペテルブルグ，1903年。中国の国家機構と統治組織，セントペテルブルグ，1903年。「中国の国家組織」補足，セントペテルブルグ，1909年。中国の哲学者孟子，中国語より翻訳，注解付，セントペテルブルグ，1904年。中国テキスト

選，セントペテルブルグ，1904年。中国の憲法と地方行政制度，セントペテルブルグ，1910年。孔子と弟子その他の格言，中国語から翻訳，注解付，セントペテルブルグ，1910年。古代から10世紀後半までの刑事法簡史，セントペテルブルグ，1880年。中国語研究のために，横浜，1908年。中国の改革運動，「ヨーロッパ通報」1897年，9—11号。北京での包囲の二カ月（1900年3月18日より7月31日までの日記），「ヨーロッパ通報」，1901年，2—3号。黒竜江省の記，ウラジオストーク，1896年。

ザハーロフ（Захаров, Иван Ильич）（1814—85）はロシヤの傑出した中国学者であると同時に外交官でもあり，この点フェドレンコ博士に似ている。家庭は田舎の下級職員で，ヴォロネージのセミナリー卒業後ペテルブルグ神学校で学んだ。1839年ロシヤ宣教師団の一員として北京に派遣され，1850年まで滞在した。ロシヤと清の通商貿易を促進することになった1851年の伊寧，露清条約の締結交渉に参加している。1851年から64年まで伊寧で領事をし，1869年よりペテルブルグ大学で教鞭をとる。1875年満洲文学で博士称号をうけ，1879年教授になった。

ザハロフは東洋語のうちでも中国語と満洲語に巧みだったから語学方面の労作も残しており，「全満露辞典」（1875）を編さんし，「満洲語文法」（1879）も著わしている。これらはロシヤだけでなく世界の満洲研究に寄与するところ大といわれる。

かれはまた中国経済の研究家でもあり，中国の国民経済史の問題に手をつけたのはロシヤと全ヨーロッパで最初の人とされ，「中国の土地所有」と「中国人口の歴史的概観」（1852年）は中国の資料をよく研究した上で，古代から19世紀までの中国の土地関係の歴史をみたもので，非常に実証的な資料を含み，ひろく外国の学者にも利用されているそうである。この外ザハーロフの編さんによる「西中国版図の記述」などもある。

以上が大体ロシヤの中国学者で，ついでフェドレンコ博士はソビエトの

中国学者アレクセーエフに移る。

「ロシヤの中国学者の学問的遺産はソビエト時代の中国文学史研究の土台となった。ソビエトの中国学者と文芸学者はこの基礎をもとにして中国文学研究の分野で著しい前進をとげた。アカデミー会員ヴェ・エム・アレクセーエフは実り豊かで大きな業績をあげている。かれは中国文学の碩学で才能ある翻訳家だった。50年にわたる学問的活動でアレクセーエフは中国文学研究に偉大な貢献をし，多くの中国文学研究書を書いている。その研究は面白い，中国詩人の作品，特に司空図の「詩品」にかんするもの，詩人陸機の研究（古代ローマ市民ガラーチーと中国詩人陸機の詩論[1]」論文「中国文学史における反侵略斗争の反映[2]」，「フランス人ブアロと中国における同時代人の詩論」，「中国詩と中国詩人のしめす魅力」，その他は興味深い。アレクセーエフはロシヤと中国の文化的なむすびつきにも注意をむけている（「中国におけるゴーリキイ」，「中国詩におけるレールモントフの詩」，「プーシキンの「エヴゲーニイ・オネーギン」の新中国訳について」その他）。このほか，中国語，中国の歴史，人種誌学，芸術，中国学等の諸問題にかんする数多い労作もアレクセーエフの筆になるものである。

(1)　「ソ連科学アカデミー通報」文学，語学部門，1944年，第3巻，4分冊，43—164頁。

(2)　同上，1945年，第4巻，5分冊，187—199頁。

アレクセーエフは李白，陸機，司空図，文天祥その他の中国詩人の詩を名訳し，中国文学史概論を書いた。とくにアレクセーエフの翻訳になる蒲松齢の聊斎志異は芸術的価値が高い。この翻訳は小説の意味のゆたかさを正確につたえているだけでなく，言語方法が簡潔で，有名な聊斎志異の芸術的特徴もとらえている。アレクセーエフは多年聊斎志異の研究にしたがい，独特なこの小説の社会的意義をみとめた最初の研究者のひとりである。ここに疑いもなくかれの功績がある。」

ソビエト大百科辞典には次のような記述がある。

アレクセーエフ（Алексеев, Василий Михайлович (1881－)はロシヤ・ソビエトの中国学者でアカデミー会員。1902年ペテルブルグ大学東洋学部卒業。1916年に「詩人にかんする中国詩。司空図（837—908）のスタンス，翻訳と研究」でマギストル学位をとる。1918年からレーニングラード大学教授，1923年通信員士にえらばれ，1929年ソ連科学アカデミー正会員となる。

アレクセーエフは中国学の各方面にわたり多数の労作をものしている。なかでも有名なのは中国文学史，人種誌学，中国の文化と文字にかんする研究である。1947年ソ連科学アカデミーはアレクセーエフの指導によりアカデミー大華露辞典の出版を準備した。アレクセーエフの中国文学関係労作はその翻訳に反映されている。それらの翻訳は優秀で，正確さと高い芸術性をもっている。著作は次のとおりである。

著作，詩人にかんする中国の詩，司空図（837—908）のスタンス，翻訳と研究。（中国語の原文付），ペトログラード，1916年。不死の双生児，中国民話の研究，ロシヤ科学アカデミー所属人間学と民族誌学の博物館の彙編，第5，7巻，1918年。中国文学，東洋文学，2期，ペトログラード，1920年。漢字とそのラテン化，レーニングラード，1932年。聊斎志異，Лисьи чары〔翻訳と研究〕。聊斎志異選，1巻，ペトログラード，1922年。聊斎志異，和尚—妖怪，モスクワーレーニングラード，1923年。奇怪な物語，レーニングラード，1928年。常ならぬ人々の話，モスクワーレーニングラード，1937年。ローマ市民ガラーチーと陸機の詩論，「ソ連科学アカデミー通報，文学と言語の部門」，1944年，3巻，4期，その他。

アレクセーエフにつぐソビエト時代の中国学者につきフェドレンコ博士はさらにつづけて，

「今日では中国学者のエリ・ゼ・エイドリンとエリ・デ・パズネーエワが中国文学研究に実りゆたかな仕事をしている。ソビエトに中国古典文学を紹介して著しい貢献をしたのがエイドリンが訳した白居易の詩である。最近出たかれの現代中国文学にかんする著作も興味がある。[(1)] パズネーエワは唐の

詩人元稹[2]の研究をしていたが，現在は魯迅研究[3]で成果をあげている。現代中国文学作品の翻訳の多くはパズネーエワの手になる。

(1) エリ・エイドリン，今日の中国文学，モスクワ，1955年。
(2) エリ・デ・パズネーエワ，元稹の社会・政治・哲学的見解の問題によせて，極東諸国の歴史にかんする問題集，モスクワ大学出版，1952年。
(3) エリ・デ・パズネーエワ，新民主主義文化のため戦う魯迅，「モスクワ大学通報」

レーニングラードの少壮中国学者ヴェ・ペトロフは艾青にかんする書物を出した。

特に中国人民が勝利して中ソ両国人民の文化交流を妨げていた障害がなくなってからソ連における中国文学研究はめざましく発展した。

最近わが国では現代と古典をとわず中国作家の書物がたくさん出版されている。

ロシヤ語訳された中国作品のうちには，偉大な詩人屈原の作品，偉大な歴史家司馬遷の「史記」，羅貫中の「三国演義」2巻本，施耐庵の「水滸」2巻本，杜甫詩集，唐詩集，唐人小説選，「今古奇観」（17世紀）その他がある。

とりわけ最近はロシヤ語訳されるものに現代作家が多く，魯迅，郭沫若，茅盾，老舎，丁玲，艾青，趙樹理，周立波，劉白羽，蕭三その他人民中国の散文家，詩人，劇作家のものがある。現代および古典の中国文学をロシヤ語やソ連の各民族語に訳す翻訳家があらわれたので，ソ連の中国文学史研究は大いに進み，中国文学の多くの問題を研究しているソビエトの文芸学者は急速な発展をすることになろう。

ソビエトの文芸学者たちは尊敬と愛情をいだきつつ中国文学を研究している。」

フェドレンコ博士のロシヤ・ソビエト中国学の歴史はこれをもって終る。ここで注意すべきことはフェドレンコ氏がかれ自身について一言も語っていないことである。またフェド氏は「中国文学」のみならず，その他の著

書論文でも自分について語っていない。これは自分を宣伝することをいさぎよしとないゆかしい人柄のいたすところであろう。それだけに私はフェドレンコ博士につき多くを語る義務めいたものを感じる。しかしこれは「ソ連における中国文学研究—フェドレンコ」として次回に述べる予定であり，本稿では他のソビエト中国学者につき敍述をすすめてゆくこととする。

エイドリン（Эйдлин, Лев Залманович）

フェドレンコ博士が前記のようにほめているエイドリンによる白居易の翻訳は「中国詩選」の Антология Китайской поэзии 2. の230頁—252頁に収められている。

Собираю траву дихуан.

В жестокую стужу в деревне.

Скорблю о смерти поэта Таи Цюя.

Я остановился на ночь в деревне на северном склоне горы Цзыгэ.

Я смотрю, как убирают пшеницу.

Я впервые на Тайханской дороге.

Мой вздох при взгляде на гору Сун и реку Ло.

Спрашиваю у друга.

Я сшил себе теплый халат.

Луна на чужбине.

Цзяннаньские воспоминания.（Ⅰ—Ⅲ）

このほか古典，現代にわたり多くの翻訳がある。「今日の中国文学」を私は読んでいないが，同種のものでより新らしい著作に「中国文学」がある。これはソローキンと共著になり一種の中国文学史であるが，古典に浅く現代にくわしい。エイドリンのもうひとつの論文「現代中国文学」はソ連の中国文学論に共通して批判的リアリズムから社会主義リアリズムへの発展として現代中国文学をあとずけ，共産党の文芸指導がつよくうち出されているという型にはまったもので，独自の見解はみえない。この人の仕事は翻訳のほ

うがよさそうである。翻訳は現代にまでわたり田漢の詩なども訳している。

著書論文翻訳等は次のようである。

中国の出版物に。ソビエト文学にかんする「文学月報」—外国文学，1941，5，224—225頁。

文学と軍隊，中国雑誌「解放軍文芸」に（「解放軍の文学と芸術」），1955，第1—4号，—ノーヴィ・ミール，1955・7，218—221頁。

文学と計画，中国雑誌「文芸報」に，（「文学と芸術」），1956，第8号，—ノーヴィ・ミール，1956，7，204頁。

今日の中国文学—モスクワ，「ソビエト・ピサーチェリ」出版，1955，300頁。

現代中国文学の積極的英雄—「ズナーミヤ」，1954，10，182—192頁。

現代中国文学について—ソ連科学アカデミー東洋学研究所簡報，XVII，1955，10—19頁。

民主中国文学の新らしい人間形象—「ズナーミヤ」，1948，8，167—176頁。

民主中国建設者の形象。—「ズナーミヤ」，1950，7，180—192頁。

1950年の中国文学における労働者のテーマ。—ソ連科学アカデミー東洋学研究所学術報告，第3巻，「中国集」，1951，191—210頁。

新らしきものの特徴。—「ズナーミヤ」，1951，8，176—185頁。

新らしい中国文学（発展簡史）。—中華人民共和国における文化革命の諸問題，モスクワ，1960年，137—198頁。

中国文学（簡史）。モスクワ，東洋文献出版所，1962年，251頁。

中国文学（簡史）はヴェ・エフ・ソローキンと共著で，本書中の「生きている伝統」中の「詩」と「現代中国文学」をエイドリンが執筆している。

上記のほか翻訳には次のようなものがある。

崑崙，毛沢東，雪，毛沢東

臧克家 Наша повозка мчится на фронт. Он приехал дамой.

田漢　Возница (из поэмы) 趕車伝

パズネーエワ（Позднеева, Любовь Дмитриевна）は中国古典文学から現代文学にいたる研究家でさきにフェドレンコ博士がのべているように最初は唐の詩人元稹の研究に従っていたが，その後魯迅研究でいい仕事をしている。1932年レーニングラード大学卒業の哲学博士である。大学を出るとウラジオストックで中国人教育の学校に勤めること数年，1937年以来極東大学で中国文学史を講義し，1944年よりモスクワ大学に転じて中国文学史を担当している。事情にくわしい東大の小野博士によると，パズネーエワは中国人と結婚しており，かの女の労作は夫君の援助を多分にうけているのではないかともいわれる。それほどこの人の研究はよくて群をぬいている。元稹の研究をわたくしは読んでいないが，魯迅研究は西洋人の水準をはるかにこえており，中国・日本の研究にも影響をあたえている。以下パズネーエワの魯迅論につきすこし述べよう。

パズネーエワの魯迅論の特徴はその独創性にある。研究にあたって各種の文献を自己のものとしていなければならないことはいうまでもない。この人はその上にたってほかの人にない独自の魯迅論を展開している。これはわたくしひとりの感じかもしれないが，一生を魯迅にかけているような迫力を感ぜしめずにおかない。20数年ものあいだ魯迅にとりくみ，学位論文が魯迅で，専著「魯迅」（1957年）についで，さらに「魯迅—その生涯と創作」（1959年）と補充発展させ，魯迅ひとすじに生きているこの人にはそれだけの力がある。さらにロシヤ人の研究家として誰にも共通するが，魯迅とロシヤ・ソビエト文学のむすびつきを強調し，くわしく述べていることもひときわ注意をひく。たとえば，魯迅とロシヤの革命的民主主義者ベリンスキイ，ドブロリューボフとの関係などである。パズネーエワはこの関係をつよくみて，魯迅の思想発展上ベリンスキイ，ドブロリューボフの文学批評が重要な

はたらきをしており，二葉亭四迷がそのかけ橋となったといっている。二葉亭はドブロリューボフの「文学の本色及び平民と文学との関係」などを翻訳しているほか，ロシヤの革命的民主主義者の思想を手記などに書いているが，魯迅はそれを読んでいた。「1907年の魯迅の論文をみると，かれの立場がドブロリューボフの思想的立場にあるプーシキンやレールモントフの作品に似ていることはたしかである。《科学は思想を啓発し，文学は感覚を啓発する》という魯迅の言葉によって，かれが二葉亭をとおしてベリンスキイの思想に近かったことがわかるだろう。しかし，おおむねロマンチックな傾向のつよかったこの時代に，革命的民主主義者の文学・美学思想はあまりつよい影響をかれにあたえていない。その影響力がめだつようになったのは，辛亥革命後魯迅がリアリズムへ移ってからのことで，芸術のための芸術は否定され，《生活の詩》やほかの理論的立場を確信するようになる…」とロシヤの革命的民主主義者とのむすびつきのうちに当時の魯迅思想を特徴づけている。

辛亥革命後の絶望時代（20年代）についてもパズネーエワは問題をひとつだしている。この時代をパズネーエワは「沈黙の時代」と名づけて，魯迅の内面的蓄積時代となし，すぐれた言葉の芸術家となり，ひろい民族遺産の領域で博学となり，中国文学研究上改革をなしとげた功績をあげてから，魯迅の伝記があまり研究されていないことを指摘している。「この時代の魯迅が政治活動をしたと判断できる資料はないが，ただひとつ，清朝復辟運動に抗議して教育部を辞職したことがよく知られている。魯迅日記によると，むかしの友人と会っている，だがこの交友も郷里から送られたハムを喰べたり，近所の料理屋で飲んだりするためだったらしい。失望と憂うつの時代にかれがどんな話をしたものか，日記には書いてない。魯迅と同時代の人びとの追憶がもっと公刊されると，この時代の魯迅の生活がもっと完全にしかも明らかになるだろう。」こう中国の研究家に問題をなげかけている。

パズネーエワがよく魯迅を読んでいることは次の例をみればわかるだろ

う。「知識は罪なり」のツルツルした連中が罰をうけずにいるのはデューイの弟子胡適らの自由主義者である点をあばいていることや，「狂人日記」で「あるものは…人を喰うのをやめ…そして人間に，ほんとうの人間になった」の「ほんとうの人間」は，人間による人間の搾取を永遠におわらせた国ソ連について，当時の中国文学としてはじめて述べたものだ，といっていること，また「引きまわし」で，「野次馬には見世物さえあればいい，だから囚人にあきると，こんどはぶっつかった人力車をみようとする」この街頭風景を「野草」の「復讐」にひっかけて「多くの無関心な野次馬にたいする憎しみ」をおこさせるとしていることなど，なるほどと感心した。

作品論も特異で，中国とソ連の他の人びとの魯迅論は規格化されてしまっているのに，パズネーエワはここでも独創的である。魯迅の作品を大きく小説，評論，追憶記，散文詩，諷刺の神話・伝説にわけ，これをさらに魯迅の思想的・文学的・美学的思想の発展を中国の民主・民族革命の進展とのからみあいのうちにみながら分析している。

小説の分類のしかたもおもしろい，とるにたらぬ人びとの運命，きずある玉，無思想の人，探求者の四種にわけている。

「おおむね，作品のうち小説の地位比重が評論より小さいこと，小説の叙情的なもの，諷刺的グロテスクなものと，評論の戦斗的で尖鋭な暴露のあいだには共通するものがないようにみえても，実は小説と散文詩のテーマは評論にしみとおっているし，その反対のこともいえる。つまり，魯迅に発生した思想と蓄積された観察は評論に反映されてから小説の形象，典型に肉づけされている。」こういう評論と小説との関係はもはや周知のことで異とするにたりないが，パズネーエワはこの観点から実にこくめいに各作品をしらべあげていることを強調しておこう。

「魯迅の作品はひろい生活の画面といってよいが，かれの注意の中心にあるのは，人間と環境の悲劇的葛藤である。有能な暴露家魯迅は人民に敵対する社会の相互関係をあばくことに巧みであった。かれがこれまでの作家と

異るのは，社会のいろいろな階層の人びとを主人公にしていることである。その作品には典型と形象のむれがあり，そのどれもが苦んだり，その日暮らしをしたり，抵抗したりしている人たちである。

当時の魯迅の作品の本質的特徴をおしなべていえば，中国リアリズムの特徴となる。かっては豊かな文化のさかえた半封建・半殖民地中国の特殊な環境と作者のきわだった個性が，筆端から溢れるすべてにたぐいまれな民族性の烙印をおさずにはおかない。」

このようにパズネーエワが従来の中国作家とは異質なものを魯迅にみいだしながら，それと同時にきわめて中国的なもの，民族性をも強調し，その統一のうちに作品をみているのは正しい。魯迅の全作品をこう規定してからパズネーエワは個々にわたって分析しているが，それはほぼ次の形象に分類していいように思う。

とるにたらぬ人物の形象。これには「孔乙己」，「白光」，「風波」，「明日」，「祝福」，「故郷」などが入る。

きずある玉の形象。「薬」，「頭髪の話」，「長明灯」，「引きまわし」，「阿Q正伝」など。

無思想の人の形象。「石鹸」，「兄弟」，「高先生」，「幸福な家庭」。

敗れし人の形象。「居酒屋にて」，「孤独者」。

探求者反逆者の形象。「秋野」，「雪」，「故郷」，「旅人」，「狂人日記」，「長明灯」，「死火」，「薬」，「傷逝」，「離婚」，「劉和珍を記念して」など。

積極的主人公の形象。「小さい出来事」，「劉和珍を記念して」，「墨子」，「理水」。

つねに被圧迫者の友，味方であり，圧迫者にたいして激しい憎しみにかられていた魯迅，愛と憎しみを精神の支えとしていた魯迅が，旧社会でさげすまれ，はずかしめられ，見すてられた人びと，ふるい社会では取るにたらぬとされている人びとをいとおしむ心，それが取るにたらぬ人の形象をつくっ

ている。パズネーエワはこれらの作品を「人を喰う社会の道徳にたいする怒りにみちた抗議が，冷たい社会の罪なきいけにえの鮮明な叙情的形象をとおして，熱烈に反響しはじめた」といっている。しかし，おなじ旧社会の悲劇的インテリ孔乙己と陳士成の二人を分析して，パズネーエワは陳士成のエゴイズムにはむかむかするが，孔乙己は人間味ある愛情があるので魅力的だと述べている。このへん他の研究家なら大いに社会主義の道徳論をふりかぶるところであるが，この人はあまりそういうことはいわない。

パズネーエワは「きずある玉」でこう書いている。「魯迅は痛みや痒みをおぼえるように書かねばならなかった。祖国はひぜんにかかった美女みたいなものだったから，それを憤りにみちた真実の言葉でなおしたのである。魯迅は日常の問題を作品にとりあげ，するどい武器の笑いをもちいていることが多い。あるばあいは諷刺が致命的打撃をあたえ，時には無気力と沈滞を自覚させ，現実をみつめさせ，無知と不正に戦いをいどませている。こうして魯迅は現機構にしがみついているものを打ちのめしたが，それは同時に，かれらの影響をうけ，圧迫をこうむり，反抗心をなくしてその日暮らしにおちているものを目覚めさせようともしている。」だがここで注意をひくのは，魯迅の俗衆蔑視の精神を強調していることである。むろん魯迅は都市農村をとわず働らく人たちのたちおくれ，卑屈さ，奴れい根性を悲んでいる。だがそれだけにとどまっていない，つめたい世間で亡んでゆかねばならない中国のすぐれた子女を思う心の痛みは，他方では魯迅に俗衆蔑視の憎しみさえかきたてる。「きずある玉」に分類された「薬」，「頭髪の話」，「長明灯」，「引きまわし」などは俗衆にたいする愛と憎しみの矛盾と統一の上にくみたてられているといってよい。「黄老人が怖ろしい物を買いにいった刑場には群衆がたかっている。魯迅はかれらがどんなにノロノロと緩慢で生気にとぼしいか，俗物としてのくさりきった性質を描いている。」「引きまわし」でも俗衆を対比させている。…野次馬には見世物があればいい，だから囚人にあきると，こんどは衝突した人力車をみようとする。魯迅はこの街頭

の光景を描くことにより，みずから認めているように，「多くの無関心な野次馬にたいする憎しみ」をおこさせる。パズネーエワは支配階級の思う壺にはまった俗衆の暴露という魯迅思想がさらに発展し鮮明に芸術的具象化されたもの，それを「阿Q正伝」にみている。　未　完

（本稿は文部省科学研究費による研究の一部である）